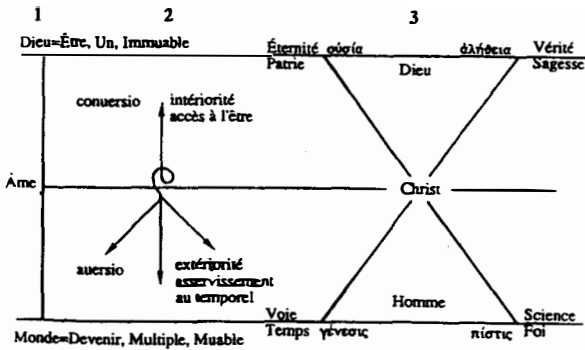


## Diagramme



## イエス～信仰

アウグスティヌスは、このような階層的な世界像を描いていた。これは、ヘノロジーというよりも、オントロジーに属する。この着想を、かれは新プラトン派の書物から得た。マデックは、アウグスティヌスは、ポルヒュリオスから学んだと見る。それはとりわけ、魂としての人間をメーサー・ウシアとしてみるアントロポロジーによる (p. 291; p. 303)。

本書は新鮮な視点を提供する。それをマデックは従来の額縁のなかに収めるのではなく、自由な大空のキャンパスに、大胆に、しかも、厳密に、スケッチした。われわれはさらに、これをてがかりに、同一性の、一層、根源的な自由な思索による彫塑へと赴かなければならないであろう。

Édouard Jeuneau: *Études Érigéniennes*.

*Études Augustiniennes*, Paris 1987. 749p.

今 義 博

およそ十年前の1980年にはエリウゲナ研究の状況は例えば次のように述べられている。「ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナは、その思想がもつ並外れた高邁さと深淵

さのゆえに、本来与えられてしかるべき哲学史上の第一級の地位を今日ようやく占めんとしている。実際ここ数年来、中世哲学の専門家たちは彼の著作の校訂出版及び研究に着手し、かくして彼のもつ富のすべてが我々の前に明かにされようとしている」<sup>11</sup>。

以来今日に至るまでの欧米におけるエリウゲナ研究は以前に比較すれば目を見張る隆盛を来している。本書はそのような現代のエリウゲナ研究をリードして来た代表的な学者の一人であるジョノー (Édouard Jeuneau) のエリウゲナ研究論文集である。彼は1924年生まれで、中世哲学史博士 (Docteur en histoire de la philosophie médiévale)、文学博士 (Docteur ès lettres) その他の肩書を持つフランスの中世哲学研究者で、現在パリの CNRS (Centre National de la Recherche Scientifique) の Directeur とカナダのトロントの Pontifical Institute of Mediaeval Studies の教授を兼務している。エリウゲナ研究との関わりでは Society for the Promotion of Eriugenian Studies (略称 SPES) の副会長も務めている。彼の名前はわが国ではクセジュ文庫の『中世哲学史』(*La Philosophie médiévale*, 1963; 3<sup>e</sup> éd. 1975. 二宮敬訳, 白水社) の著者として知られているし、中世哲学の研究者の間ではコーンシュのギョームの著作の批判的校訂版 *Guillaume de Conches, Glosae super Platonem. Texte critique avec introduction, notes et tables* (Collection "Textes philosophiques du Moyen Age" XIII) Paris, Vrin (1965) 358p., 4 planches. やシャルトル学派に関する研究書 *Lectio philosophorum, Recherches sur L'École de Chartres*, Amsterdam, Adolphe M. Hakkert (1973) XVI-396p., 14 planches. 等によっても知られている。

これらの業績以後、彼の学問的関心はエリウゲナに集中的に傾斜し、すでに次のエリウゲナの三つの著作 (三番目のものは原典の一部分のみ) の批判的校訂版を刊行している: (1) Jean Scot, *Homélie sur le Prologue de Jean*. Introduction, texte critique, traduction et notes (collection "Sources chrétiennes" 151), Paris, Édition du Cerf (1969) 392p., 4 planches. (この中の Introduction の第1章は本書第1部第1章に収録), (2) *Commentaire sur l'évangile de Jean*. Introduction, texte critique, traduction, notes et index (même collection 180) Paris, Édition du Cerf (1972) 475 p., 4 planches., (3) *Le Commentaire «érigénien» sur Martianus Capella (De nuptiis, Lib. I)* d'après le manuscrit d'Oxford (Bodl. Libr. Auct.

T. 2, 19, fol. 1-31), Appendice à *Quatre thèmes érigériens* (Conférence Albert le Grand 1974), Montréal-Paris, Vrin, 1978, pp. 91-184. またギリシャ教父マクシモスの著作『アンビグア』のエリウゲナによるラテン語訳の批判的校訂版 *Maximi Confessoris Ambigua ad Iohannem iuxta Iohannis Scotti Eriugenae latinam interpretationem*, Coll. «Corpus Christianorum. Series Graeca», Turnhout, Brepols. も公にしている。なお上掲の *Quatre thèmes érigériens*, 1978 の第 1 部は Conférence Albert le Grand 1974 の講演であり、本書第 2 部第 1 章に収められている。ジョノーのエリウゲナに関する業績は以上の著作の他に文学、古文書学、哲学史、哲学などの諸分野に亘る多くの論文がある。これらのうち 1969-1985 年間に書かれた 22 篇の論文を集成し、写真製版したものが本書である。うち 20 篇が既発表、2 篇が初出で、どれをとってもそれぞれの方面のエリウゲナ研究にとって必ずや参看する価値のあるものと思われる。

本書の構成は、序文に続いて 22 篇の論文が内容別に 5 部に分類配置され、その後各論文に対する補充・訂正が付され新しい参考文献に対する参照指示が施されている。さらに Jean-Paul Bouhot の手に成る、I. Table des manuscrits, II. Table des noms, III. Index analytique が最尾に付されている。

本書の構成は次のとおり。

## 第 1 部 ヨハネス・スコトゥスと彼の環境

### 第 1 章 人物と著作

### 第 2 章 九世紀におけるラン (Laon) とオセール (Auxerre) の学校

### 第 3 章 ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナ<sup>2)</sup>とギリシャ語

### 第 4 章 中世初期における古代哲学の遺産

### 第 5 章 教父の遺産

- 1 ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナの著作における偽ディオニュシオス、  
ニュッサのグレゴリオス、証聖者マクシモス
- 2 ヨハネス・エリウゲナと証聖者マクシモスの『アンビグア』

## 第 2 部 エリウゲナに特徴的な主題

### 第 1 章 エリウゲナの四つの主題

### 第 2 章 ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナにおける「海」の象徴表現

### 第 3 章 ヨハネス・スコトゥスと火の形而上学

## 第4章 ヨハネス・スコトゥスと皮肉

## 第3部 新プラトン主義のシェーマ：分割と再統合

## 第1章 ニュッサのグレゴリオスとヨハネス・スコトゥス・エリウゲナにおける性の分化

## 第2章 還帰という主題

## 第4部 エリウゲナの写本数篇について

## 第1章 クリュニーの図書館とエリウゲナの著作

## 第2章 証聖者マクシモスの『アンビグア』のエリウゲナによる翻訳：トーマス・ゲイル (1636-1702) と Codex Remensis

## 第3章 マザリーヌ写本 561 管見

## 第4章 『ペリピュセオン』の最初のイギリス人編者マームズベリーのウィリアム

## 第5部 エリウゲナの後継者

## 第1章 オセールのヘイリクスの説教に対するエリウゲナの影響

## 第2章 エリウゲナ踏襲：『ヨハネ福音書』序文についてのオセールのヘイリクスの説教

## 第3章 人間の創造に関するカロリング朝期の資料

## 第4章 ヨハネス・エリウゲナ思想圏に属する一新テキスト (B. Bischoff と分担執筆)

第5章 Saint-Emmeram の *Codex Aureus* の詩 (P. E. Dutton と共著)

## 第6章 イスラエル・スコトゥス (Israël Scot) の資料に関して

紙数の制限上、特に哲学と源泉史研究の部分、すなわち前半の第1部～第3部を中必に述べることにする。

第1部全体はジョノー自身の言葉を借りれば「時代と社会におけるエリウゲナについての解説」(序文)であるが、それはまた自ずと古代後期から中世初期の思潮や文化全体についての上質な概説となっている。第1章「人物と著作」は上述のように Jean Scot, *Homélie sur le Prologue de Jean*. の第1章部分を転載したものである。この伝記的記述は John J. O'Meara, *Eriugena*, Oxford: Clarendon Press, 1988, pp. 1-79. の記述と並んで今日最良のもので、エリウゲナの置かれていた思想的、文化的環境の概観を与える。

カール大帝（シャルル・マーニュ）からエリウゲナの保護者シャルル二世（禿頭王）に至る文化政策はエリウゲナ哲学の形成と普及の下地を作ったが、その点でエリウゲナに最も関係の深いのはフランスのランの司教座聖堂付属学校とオセールのサン・ジェルマン修道院付属学校である。第2章はこれら二つの学校を拠点とする当時の思想・文化の動向とそれに対するエリウゲナの関わり及びエリウゲナ哲学の普及を実証したものである。その文献学的、哲学史の実証には刊本と写本の渉猟の限りを尽くしていると思われるし、論述は明解で説得力がある。

第3章は、当時カロリング・ルネサンスを推進する知識人たちがギリシャ語やギリシャ文化に対して持っていた関心の様相や水準を実証した上で、ニュッサのグレゴリオス、偽ディオニュシオス、証聖者マクシモス等のギリシャ語文献のラテン語訳に表れているエリウゲナのギリシャ語への関わりの優れた独自性を明らかにし、結論としてそれらの翻訳においてエリウゲナがたんに文献学者であるばかりでなく常に哲学者でもあったこと、また西洋におけるヘレニズムの歴史に対するエリウゲナの貢献がいまのところ正当な評価を得るに至っていないことを指摘する。

確かに今日では偽ディオニュシオスのラテン語訳はエリウゲナ訳が最初のもではなく、同時代者ヒルドイーヌス（Hilduinus）が先鞭をつけていたことが知られているし（しかし実質的に失敗に帰して公にされなかった）、エリウゲナ訳には訳訳が見出されるのも事実である。しかし、ランの図書館に伝わる当時のギリシャ語辞典の極端な貧弱さを見、エリウゲナの用いた、発音記号も句読点もなく語間に隙間を置かずべた書きされたギリシャ語写本のオンシアル書体を考えただけでも、彼の訳業の完成度には喫驚せざるをえない。出来映えはともかく自らギリシャ語の詩を書いたということも当時のギリシャ語知識の水準からすれば並外れたことである。エリウゲナがギリシャ人だという伝説が生じたのも無理からぬことである。

第1部第4章と第5章は哲学史的考察であるが、第4章は7—11世紀の西洋中世における聖俗両面の古代哲学の遺産についての概説（un rapide survol）でエリウゲナとは直接関係したのではなく、第5章がエリウゲナ哲学に最も深い関係を持つギリシャ教父たちに焦点を当てている。一言注意しておく、確かにジョノーはエリウゲナにとって決定的に重要なアウグスティヌスを本書の表題に直接取り上げてはいないが、巻末の固有名詞索引（Table des Noms）を見れば本書全体を通じてアウグスティヌスの名前が最も数多く言及されていることが分かるように、アウグスティヌスは

ほとんどのテーマに関わって論究されているのである。

第5章第一論文は偽ディオニュシオス、ニュッサのグレゴリオス、証聖者マクシモスの三人の教父との関係において「西洋哲学史におけるエリウゲナの位置の特別な、独自の面を吟味する」。著者は『ペリピュセオン』におけるこれら三人からの引用数を調査してエリウゲナ哲学における「量的評価」を試みるが、その限界が明らかにされ、代って「質的评价」が追究される。エリウゲナは神と人間との関係を中心とするアウグスティヌスとディオニュシオスの世界観の相違を無視して両者を調和することにより、アウグスティヌスに流入したプロティノスやポルピュリオスの新プラトン主義とディオニュシオスに見られるプロクロスの新プラトン主義とを融合し、以後の西洋中世思想を貫流する独特の新プラトン主義哲学を最初に確立したことが明らかにされる。結論として、エリウゲナにとってギリシャ教父のうちディオニュシオスは第一義の重要性を持ち、他方最も強力な影響を与えたのはマクシモスであるが、またニュッサのグレゴリオスは聖書解釈の態度や哲学的神学的概念のある重要な部分においてエリウゲナに決定的な影響を与えていることが指摘される。

第5章第二論文は、エリウゲナがマクシモスの『アンビグア』を通して思想を形成する過程を、1) 聖書 (の解釈方法)、2) 哲学の用語とテーマ、3) 神学の用語とテーマ、4) (東方教会の) 霊性 (の影響) という項目に亘って明らかにしたものである。思想の形成過程を論証することは思想の生の内面に深く立ち入ることを要求される困難な仕事であるが、ジョノーはその要求によく応え、例証に最適なテキストを選択して説得力ある論証に成功している。

第2部と第3部はエリウゲナ哲学の原理論に関わるものである。他の分野の論考についても言えることだが、ジョノーの論考態度の特徴は近・現代の哲学の諸概念や部門分類の枠組にそのまま依りかかるのではなく、入念な読解と文献学的哲学史的調査に基づいて、繊細な文学的哲学的感性をもってエリウゲナの思想の特徴を的確な具体性において捉えてそれを明瞭に浮かび上がらせるところにある。第2部の第1章についてはかつて紹介したことがあるが<sup>3)</sup>、他の3章も含めていずれも哲学的テーマをそのような態度で解明することに成功している。そのうち、第3章「ヨハネス・スコトゥスと火の形而上学」は1984年のオックスフォードにおける講演で、本書で初めて活字になった。「火の弁証法」と言ってもエリウゲナがロバート・グロステート (Robert Grosseteste) の「光の自然学」に相当するものを編み出したわけではない。この表

現はG・バシュラール (G. Bachelard) の「火の形而上学」から借用したもので (エリウゲナの哲学にこの呼称を用いたのはジョノーが最初であるが、同じくバシュラールの「火の弁証法」という表現もふさわしかったかも知れないと彼は洩らしている)、著者が究明しているのは、エリウゲナが火の観察に基づいて神、人間、宇宙を説明しようとしたその独自の哲学的態度ないし立場である。それを「形而上学」と呼んだのはそれが「自然学」と区別しなければならない性格のものであるからである。例によって、ジョノーは思想的源泉に博搜の眼を光らせエリウゲナ哲学の「火の形而上学」としての姿を見事に描いている。

第3部は表題の通り、エリウゲナの思惟方法や哲学体系の基本的枠組をなす新プラトン主義的弁証法、すなわち分割と統合、発出と還帰に関したものである。その第1章はエリウゲナの哲学的・神学的人間論の基本テーマに関わる人間の男性女性への分割の問題を主としてニュッサのグレゴリオスと対比して論じる。『ペリピュセオン』におけるグレゴリオスの *De opificio hominis* からの引用数を調べるなど、両書の緊密な関係を実証的に解きほぐす一方、男女の性的区分に関する様々な教父的権威 (特にラテン世界の代表としてアウグスティヌスとギリシャ世界の代表としてグレゴリオス) の間の対立に対するエリウゲナの態度を明らかにする。第2章「還帰というテーマ」は1982年のローマとジュネーヴでの講義の要約で、これも今回初めて公刊された。第1章が分割の側面を論じたのに対して、第2章は還帰、すなわち神への万物の還帰の側面を論じる。これは上昇ないしは統合という新プラトン主義的弁証法の運動であるが、同時にキリスト教的救済史そのものでもある。エリウゲナにおいて人間は被造的宇宙の中心 (*medietas*) であり、従って世界そのものと捉えられるから、神への万物の還帰の中心となるのは人間である。それゆえ、彼の哲学においては宇宙の歴史は人間の歴史に集約される。そして人間の還帰は新しいアダムであるキリストにおいて実現される復興なのである。ところが、最後の審判において善人と悪人が区別されるとすれば、万人の救済、復興は成り立つのだろうか。悪人に対する劫罰と人間の普遍的救済とはどのように調停されるのか。エリウゲナはこの難問の解決を図って人間の還帰に「一般還帰」と「特別還帰」とを分かった。論文はエリウゲナの聖書解釈を辿りつつ、彼の試みを明かにする。

エリウゲナの写本について論じた第4部はエリウゲナのテキストの批判的校訂版の刊行に多大な貢献をしてきた著者の本領を發揮した文献学的論考である。現在彼は I.

P. Sheldon-Williams の『ペリピュセオン』の批判的校訂作業を引き継いで John J. O'Meara と共にその第4巻と第5巻の編集にも携わっていることを付言しておく。評者は文献学の門外漢なので第4部について十分な評価は出来ないが、哲学研究の分野から見てもエリウゲナを理解する上で見落とせないものばかりであることは疑いない。第5部はエリウゲナの影響を哲学史上に探求したもので、従来の哲学史研究の間隙を埋める興味深い研究である。この分野はエリウゲナ研究の進展に伴って今後大いに開発されるであろう。この種の最近の研究として W. Beierwaltes (hrsg.), *Eriugena Redivivus. Zur Wirkungsgeschichte seines Denkens im Mittelalter und im Übergang zur Neuzeit*. Heidelberg 1987. を紹介しておく。

総じて、本書はエリウゲナにおいて純理論のないし形而上学的原理に対する思弁的洞察というような方向や現代哲学にとっての意味や展望などを追究したものではなく、どこまでも哲学史的、文献学的研究である。そのような性格の研究として本書は余人の及ばぬ博覧強記で綿密な実証性と緻密で明晰な論述によってエリウゲナについて実に多くの事柄を解明した記念碑的成果であり、現代のエリウゲナ研究に一つの偉大な礎を築いたと評価したい。

残念ながら初出論文に見られたごく僅かの誤植が本書への再録に際しても訂正されていないが、判読には支障なからう。

### 註

- 1) ジョノーの著作 *Quatre thèmes érigéniens* (1978) に対してなされた J. Follon の書評中の言葉、*Revue Philosophique de Louvan*. vol. 78, no. 38, pp. 289-290.
- 2) フランス語で Jean Scot Érigène という呼称はラテン語の Johannes Scottus Eriugena に基づいている。今日でもこのように三つの名称が併称されることがままあるが、厳密にはそうした併称は疊語であり、同語反復であって正しくない。というのは、Scottus とはカロリング・ルネサンス当時は「アイルランド人」を言い、また Eriugena とは「アイルランド生まれ」を意味し、つまりは両者は同意語と考えられるからである。エリウゲナ生前当時から全中世を通じて17世紀までは一般的には Johannes Scottus と呼ばれていたのが、17世紀に Johannes Scotus Eriugena (Scottus の t と Eriugena の u が欠落しているという綴りの誤りと、Scot(t)us と Eri(u)gena を併称する誤りの二重の誤り) という誤った呼び方が普及し今日に至った。多くの研究者が(ジョノーの1980年位までは)その誤った慣習に妥協し



てきた。詳しくは拙稿「マルティニアヌスの論理学に対するエリウゲナの立場についての一考察」(平成2年『山梨大学教育学部研究報告』第41号第1分冊, pp. 68-71)を参照。

- 3) 拙稿「最近のエリウゲナ研究の概要」(昭和56年『山梨大学教育学部研究報告』第32号, 第1分冊, p. 88)参照。

---

Erwin Waldschütz: *Denken und Erfahrung des Grundes*  
 —Zur philosophischen Deutung Meister Eckharts.

Herder Verlag, 1989, 369 S.

中山善樹

エックハルト研究史において、「エックハルト像の変遷」が語られるようになってからすでに久しいが、その後も研究の進展につれて、解釈の振幅も広がってきているようであり、今日、エックハルト解釈は極端な分裂をきたすようになってきたと言われる。そのような状況において、前号の研究動向においても、素描しておいたように、Kurt Flasch の主宰する国際的な研究グループのもたらした刺戟は、はかり知れないものがある。その成果の一端は Burkhard Mojsisch が試みた、エックハルトの「始原」(principium, grunt) 概念の発掘である。

爾来、エックハルト研究においては、ラテン文テキストの内部に限定しても、「存在」(esse)と「知性」(intellectus)ないし「知性認識」(intelligere)をめぐるさまざまな紛糾した事態を、新たな視角から照射するものとして、始原概念の、テキストに密着した究明が期待されてきた。その時宜に合った研究が本書であり、本書はポッフム大学の研究グループの膨大な成果を十分踏まえた上で執筆されており、本書によって、現在のエックハルト研究に裨益するところは大であると信じる。しかしその副題がすでに含意しているように、本書の論理を一貫して追求することは、きわめて困難であり、あまりにも紆余曲折しているために、読者は当惑さざるをえないであろう。そこで以下においては、評者の眼に止まった若干のライト・モティーフを浮かび上がらせることによって、本書の理解に資するものとした。ここでは、批評はいわば解釈の解釈という形態をとらざるをえない。